

0. 引用と連結——西脇順三郎の「超」現実主義

0-1. 人間の存在の現実それ自身はつまらない。この根本的な偉大なつまらなさを感ずることが詩的動機である。詩とはこのつまらない現実を一種獨特の興味（不思議な快感）をもって意識さす一つの方法である。俗にこれを藝術といふ。

習慣は現実に対する意識力をにぶらす。傳統のために意識力が冬眠状態に入る。故に現実がつまらなくなるのである。習慣を破ることは現実を面白くすることになる。意識力が新鮮になるからである。併し注意すべきは習慣傳統を破るために破るものでなく、詩的表現のために、換言すれば、詩の目的としてつまらない現実を面白くするために破るのである。実際に習慣傳統を破るならばそれは詩でない、倫理であり哲學である。
西脇順三郎「プロファヌス」『三田文学』[第二次創刊号]（1926 年 4 月）

0-2. T. S. Eliot の詩は種々の詩人やその他の文學から種々の世界の斷片をとつてきて、それを新しく連結して新しい image の世界をつくらうとしたかなり進んだ詩であった。しかしそれは單に新しい世界にすぎなかつた。出来るだけ遠いものを連結したことではないから、詩的な美といふことが不幸にして欠けてゐる。

Auden なども obscure で近代的ではあるがこの意味での詩的美がない。詩などはその象徴とか表現の対象に関する意味が、obscure でも、その image の世界が美を構成さへすれば美しいことになるが、彼にはそれがない、エリオットの如く種々の經驗を斷片的に連結したものに過ぎない。西脇順三郎「詩の感覺性」『純粹な鷲』（1934 年 7 月）

1. 時代——引用のコンテキスト

1-1. The lights must never go out,

The music must always play

W. H. Auden, "September: 1939," *The New Republic*, LXXXXX, 1298 (18 Oct., 1939)

1-2. 明りは消されてはならない、
音楽は絶え間なく奏されねばならぬ

阿比留信訳「一九三九年・九月」『新領土』（1940 年 1 月）

1-3. あれでいいのですね
でも音楽だけはいつでもやつてゐてほしい と
誰かかすれた声で囁く

「陰翳」『新領土』（1940 年 10 月）：「8.30, 1940」

1-4. 灯りは消されてはならない
音楽は絶え間なく弾奏されねばならぬ

「アメリカ……」

僕は突如白熱する

僕はせきこみ調子づく

「アメリカ」『純粹詩』（1947 年 7 月）：「5. 30, 1947」

2. 時間——引用のコンテキスト

2-1. And the past is about to happen, and the future was long since settled.

The Family Reunion (March, 1939)

2-2. 過去は將に始まらんとし、將來は遠の昔に濟んでしまつてゐる

大竹勝「エリオットの『家族の再會』」『新領土』（1941 年 3 月）

2-3. 僕はなんにも見落しはしなかつた

過去はまさに始まらんとし

將來はとほの昔に濟んでしまつてゐる

「アメリカ」

3. 斷片の集積——『荒地』の方法、「アメリカ」の方法

3-1. Shall I at least set my lands in order? . . .

With these fragments I have shored against my ruins. (*The Waste Land*, ll. 425-30.)

3-2. 私はせめて私の領土だけでもたて直さうか……

此等の断片でもって私の廢墟を支へてゐる

冬村克彦、桑原英夫、鮎川信夫共訳「荒地・第五部」『荒地』(1940年5月5日)4-11。

3-3. エリオットの批評の或る重要部分は、詩の中にある。そのわけは、彼の詩は文學的で引用豊富であり、その引用句の使ひ方に批評的態度が含まれてゐる。彼の作品の一般的弱點はその断片性である。

北村常夫訳スティーヴン・スペンダー「詩論 Fragments」『新領土』1937年5月創刊号
Stephen Spender, *The Destructive Element: A Study of Modern Writers and Beliefs* (March, 1935)

3-4. 私は断片を集積する。私はそれらを最初は漂流物のやうに冷やかに眺めてゐるが、次第にそれらの断片によつて我々の世界が支へられてゐることに氣づく私はそれらの断片に、總括的な全體との關聯に於て、部分としての位置を與へる。勿論一つの断片と雖も全體を變へるほどの影響力を持つてゐるものであり、もしそれが精神に深く刻まれるなら、それから故意に逃れ出ようとする努力そのものが正常なものと言へぬことが屢々ある。

「アメリカ」に関する覚書『純粹詩』(1947年7月):「6.8,1947」

4. 断片の死臭

4-1. 私はやりきれぬ氣持でこの作品を放棄する。或は放棄するところまで行つてゐないにも拘らず悪い眩暈のうちで中斷する。言葉にしがみついてゐる記憶の固執と、断片の死臭と言語の保存用アルコールの厭な臭氣とを感じながら……。私の「アメリカ」がそのやうな暗い世界から生れたとしても、それは私の責任ではない。

「アメリカ」に関する覚書

4-2. 四月は最も殘酷な月である、
死地からライラックを育て、
記憶と欲望を混合し、
鈍重な根等を春雨で刺激する。

私はそこで知人を見つけ、「ステットソン」と叫んでよびとめた。

「君とはミレイでひとつ船に乗り合はせたね。

「去年君が庭に植ゑたあの死骸は

「芽を吹いたか。今年は花が咲くだらう。

「それとも突然の霜で花壇が荒されたかね。

「犬をよせつけないやうにし給へ、あいつは人間の味方だから。

「でないと、あいつは爪で掘り返してしまうからね。

「諸君！ 偽善の讀者よ！ 我が同胞よ！ 我が兄弟よ！」

上田保訳「死者の埋葬」『新領土』(1938年8月)

5. 遺言執行人の誕生

5-1. In my beginning is my end. . . . In my end is my beginning.

“East Coker,” *New English Weekly* (March 1940)

5-2. われわれは、いつまでも、いつまでも、動いてゐなければならない

今ひとつの強烈に向つて

更に固い結合を求め、更に深い交はりを求めて、

暗黒の寒冷をぬけ、空虚な荒廢をぬけ、

波の叫び、海燕と海豚の

広漠たる海をぬけて。僕の終りに僕の始めがある。

高村勝治訳『ルネサンス』(1946年11月1日)。

5-3. たとへば霧や

あらゆる階段の登音のなかから、

遺言執行人が、ぼんやりと姿を現す。
——これがすべての始まりである

「死んだ男」『純粹詩』(1947年1月1日):「十一月十九日夜」

6. 生と死の論理

- 6-1. 生きることをやめなかつた僕たち (1947)
死ぬことから生きのこつた僕たち (1951)
死ぬことからとりのこされた僕たち (1965)

- 6-2. 生きているにしちゃ 冷たい手だね
おぼえてるだろ
ジョホールの血の海峡 ブキテマの焦げた丘
きこえるだろ
破壊につぐ破壊のこだま 断末魔の軍港にとどろく火砲のうた

小首をかしげ そしらぬふりをするな
鍵穴や本のあいだにしこたま隠し込んで狐め
過去でしか会うことのないおれたちだ 何の秘密もあるものか

鮎川信夫「戦友」『文芸』(1963年1月)

7. 唯二つの仮説

- 7-1. There are two and only two finally tenable hypotheses about life: the Catholic and the materialistic.

T. S. Eliot, "Modern Education and the Classics," *Essays Ancient and Modern* (March, 1936)

- 7-2. 二つ、結局二つの維持し得る生命に就ての仮説が存在する。それはカトリック教徒と唯論者である。
羽生豊記「現代教育と古典」『LE BAL』(1938年7月25日)

- 7-3. 人生に関する二つの而して唯二つだけの終局の合理的な仮説がある——カトリック主義と唯物論である。
中橋一夫訳「現代教育論」『文学界』(1940年1月1日)

- 7-4. 人生に関する二つの、そして唯二つだけの終局の合理的な仮説がある——カトリック主義と唯物論である。
中橋一夫訳「現代教育と古典」『異神を追ひて』(1943年6月)

- 7-5. キリスト教とマルキシズムが、特に新らしく対立的に問題にされるようになってきた。これは、チャーチルの言葉を借りれば、キリスト教文化か反キリスト教文化かの世界史的課題であり、世界平和の正否を賭けて対立する二つの国家群の今後の動向を卜する重大な分岐点であり、又敗戦によって見る影もなく凋落した我国にとっては、デモクラシイ国家としての将来の資格を決する問題ともなる。T・S・エリオットは、「人生に関する二つの、そして唯二つだけの終局の合理的な仮説がある——カトリック主義と唯物論である」と言ったが、今日では、この二つの合理的な仮説が、終末論的な苛烈さをもって最後の関頭にたっている観がある。デモクラシイ諸国家が<鉄のカーテン>を意識した時から、この二つの仮説は互いに全く相異した現実的装備の優劣を競いはじめたのである。

鮎川信夫「キリスト教とマルキシズム」『純粹詩』(1947年12月)

- 7-6. ……エリオットは伝統主義者で同時にモダニストでありえたという稀な例だ。ああいう例は、これからはちょっと……」

——ありえないかもしれないな。しかし、エリオットの文学的価値は西欧におけるマルクス主義の頹勢と相対的に関連しているね。アメリカでは、マルクス主義はいかなる体系としても崩壊したが、ヨーロッパでもノスタルジーを感じる程度に頹落してしまった。マルクス主義は近代インテリの信仰ただけに、その残した空隙は大きい。高級なインテリにとってエリオットは、いわばつなぎの役を果たしたとおもう」

鮎川信夫「午後三時の対話3」『詩芸術』(1969年6月)